# 初恋の記憶

山菜歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
初恋の記憶

【Ｎコード】
Ｎ１７２４Ｈ

【作者名】
山菜歩

【あらすじ】
高校一年生の時、私は初めて恋をした。自分の気持ちに戸惑いながらも、「恋をする」という感覚を楽しんでいた。だけど・・・。

私の初恋は遅い。
私の初恋は、１６歳の時だった。

１６歳の私は、今よりもやんちゃで男勝りだった。
通っていた高校が工業高校だっで、それも影響していたのだろう。
色気のないまでに短く切った髪。
何故か今でも言われるのだが、ヘタな男より男らしい言動。
クラスメートが私を「男勝りな歩さん」と認識するのに、そう時間はかからなかった。

だからよかったのかなぁとも思うけど、クラスメートは分け隔てなく私に接してくれた。

初恋の人も、そのクラスメートの一人だった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

初恋の彼は、クラスの集合写真で女子と間違えられるくらいの人。
・・・私服姿の集合写真で私の方が散々男と間違えられ、「私が女子です！」と何度も説明するハメになるくらいに、小柄で女顔。
私とは対照的な人だった。
だけど本人はそれをコンプレックスにしていたようで、友人達に茶々を入れられると「うがー！」と唸りながら怒り出していた。
私の友達グループではお約束（デフォルト）の休み時間の光景。
どちらかと言うと、私も彼をいじっていた方だった。

それが、いつからだろうか。
彼に好意を持つようになったのは。

彼がちょっかいをかけられている私を助けてくれたとか、教師に怒られているときにかばってくれたとか、そんなヒーローじみたことをしたことはなかった。
むしろ普通に友達としてバカをやったり、趣味のことを話したりしていただけだったような気がする。
周りの友人も影響していたのかもしれない。

今となって思うと、１６歳と言ってもまだまだ子供。
一緒に話していたりしていると、はやし立てられることも多々あった。
私は「うっさーい！！」って思いっきり反発していた。

今思うと、もうこの頃には彼のことを好きになっていたのかもしれない。
私の照れ隠しもそうだけど、彼に申し訳ないような気がして・・・。
私が彼のことを好きでいるということを知ってほしい反面、こんな自分に好かれて迷惑なんじゃないかな・・・？
そんな思いからの言動だった。

けど、同時に嬉しくもあった。
そういう事って、今まで経験したことなかったから・・・。
くすぐったいような、甘い気持ちを持てたのが嬉しかった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

―＊―＊―＊―＊―＊―＊

でもある日のことだった。
友人が彼にこう聞いたのだった。
「ねえ、お前好きな人いないの？」

「え？いないよ」

当然ショックだった。
周りもそれを察していたようで一瞬空気が凍ったが、お調子者の友達が何とかフォローしてくれて、その場は何とかなった。

ショックだったけど。
でも、自分の気持ちをそこで流す事ができなかった。
可能性はゼロだとしても、どうしても自分の気持ちを伝えたかった。

後悔を、したくなかった。

幸いなことに、どうやらその時の状況を誰かが彼の部活のメンバーに話したらしく、快く協力してくれて私が言い出しやすい雰囲気を作ってくれた。
私を「彼の所属する部活に遊びに来ないか？」と呼び寄せ、部活が終わった帰り道で私と彼をふたりきりにしてくれたのだった。
本当に友人達に感謝しつつ、彼に気持ちを伝えたのだった。
その日、彼から返事はなかった。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

「今まで通りじゃだめですか？」

数日経ったある日の彼の丁寧な断りの返事。
丁寧な返事に、私は何だか妙に安心してしまった。
「ああ、やっぱりなぁ」って。
少々失恋の傷を癒すのに時間はかかったが、それでも彼を好きになれてよかった。
素直に私はそう思った。
そして、また友人としての付き合いが始まった。
それは卒業まで続いたのだった・・・。

―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊―＊

数年経ったある日のこと・・・。
彼と会うことができた。
夜勤明けだというのに無理して都合をつけてくれた彼に感謝しつつ、数時間だけ遊ぶことにした。
高校の頃とはガラッと変わっ・・・ていなかった事は言うまでもない。

彼はダーツにハマっていると言い、ダーツコーナーに足を運んだ。
マイダーツを持っているほどのハマりっぷり。

高校時代の彼は、アニメ好きでカードゲームが趣味だった。
「大人な趣味を持ったんだなぁ、コイツ」なんて思って、私は思わずくすくす笑ってしまった。
ダーツをやったことのない私に基本をレクチャーしてもらい、いざ実践。

彼のスコアをあっさり抜いてしまい「飲み込み早っ！」って驚かれた。
的に狙いを定めている時の彼の真剣な表情を見ていて、少ーしだけだけど大人っぽくなったかな？と思った。

その後、私の馴染みの店で食事をした。
その時に、私が彼に告白した時の話になった。

「歩さんが俺に好意を持ってることは、何となくだけど気づいていたよ」
「う・・・あからさますぎたかなぁ・・・？」
「ははは。でも答えを出すのに悩んだよなぁ・・・」
「うう。スミマセン・・・」
私は思わず真っ赤になり、頭を下げた。
私のリアクションに、彼は驚いていた。
考えてみれば、こういう私を見せるのも初めてなんだっけ・・・？
反発したことはあったけど、頭を下げることなんて、高校時代はしたこともなかったもんなぁ・・・。

そして彼は、私が告白した後の事を話してくれた。
どうやら彼は、数日間本気で悩んでいたらしい。
でも、あの頃は高校生活に慣れるのに精一杯で、彼女を探すこともする余裕がなかったと。
でもそれがうまく伝えることができなくて、あのような返事になってしまったと。

・・・ホントに真面目な人なんだなぁ・・・。
私は照れ隠しをごまかすために、溶けかけた氷が数個浮いているリンゴジュースをあおった。

ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊

ふと彼の顔に目を向けたとき、無精髭が生えていた。
私は「髭ぐらい剃ってきなよねー」と思わず軽口を叩いたけど、起き抜けにそのまま来たんだから無理もない。
彼は文句も言わず、「ゴメンゴメン」と笑って流してくれた。
高校時代はそんなに意識していなかったけど、私はそれを見て「あぁ、やっぱり彼も男性なんだなぁ」って今更ながら思った。

高校生・１６歳。
大人扱いされる時で、自分でも大人ぶっていたつもりだったけど、やっぱりまだまだ子供だったんだなぁ・・・。
私はしみじみとそう思ったのだった。

「彼」へ。
ねぇ。最近連絡とっていないけど、元気にしてるかな？
私ね、今度結婚するんだよ。
「男勝りな歩さん」がお嫁さんになるんだよ？
信じられないでしょ？
今、どこにいるのか、どんなことをしているのかわからないけど、とにかく身体に気をつけて、元気でやっていってくださいね。
あと、あんたの結婚報告を楽しみにしてるからね。

ぜってぇ報告しろよ！！！

fin・・・

## （後書き）

「初恋の記憶」
最後までお読み頂き、ありがとうございます。

実はこの作品、文章書きに本腰を入れ始めた頃に書いた、私のオンライン小説の処女作となります。
（多少、加筆修正はしております）

＊実は
この作品、とある出版社で募集していたテーマをお題にして書いたものです。
結局応募することはなかったのですが、最近友人と実際に「彼」とダーツをしたゲームコーナーに足を運ぶことになり、また書き直してこちらでアップしようと思った次第です。

何とも懐かしい思い出に浸ることが出来ました。

（尚、この物語を載せるに当たって、「彼」にはきっちりと同意を得てからアップいたしました）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1724h/

---

初恋の記憶

2010年12月22日15時01分発行